

原本蒙古字韻の復元

—校正字様の各本重入漢字をめぐって(1)—

吉池孝一

1. はじめに

現存する唯一の蒙古字韻のテキストとして『倫敦抄本』(ロンドンの大英図書館所蔵蒙古字韻)がある。元代においては、蒙古字韻には幾つか異なる版があったらしく、朱宗文はそれらを付き合わせて誤りと見なしたものを正した。その訂正の内容により、4種の項目に分類し、巻首に校正字様と題して収めた。先ず、各本を通じた誤りの訂正(各本通誤字)、次いで各本に重複し誤って収められた字の削除(各本重入漢字)、更に「湖北本」と称された一本の誤りの訂正(湖北本誤)、「浙東本」と称された一本の誤りの訂正(浙東本誤)とある。

これらのうち、各本通誤字については『KOTONOHA』第70号で検討した。今回は、各本重入漢字の検討をとおして「原本蒙古字韻」の姿を垣間見ようとおもう。なお、パスパ文字は脚注の方式によってローマ字に翻字する¹。

2. 各本重入漢字

『倫敦抄本』の上三 a-b には校正字様と題された一葉があり本文の校訂について説明がなされている。その校訂の第二項目として各本重入漢字というものがある。下に示した I は『倫敦抄本』の各本重入漢字を翻字したものである。誤写が極めて多く、IIはその誤を訂正したものである。

I 各本重入漢字

【欠落】	誤以下二字重入此字内	č' ũ(a) v	連踴蹕妮靛擲箝
c' e	誤以下十字重入此【欠落】	cè	截截

II 各本重入漢字

【欠落】	誤以下七字重入此字内	č' ũ(a) v	連踴蹕妮靛擲箝
c' e	誤以下二字重入此字内	cè	截截

さらに内容の検討をとおして、パスパ文字の欠落部分を復元し、パスパ文字の誤写を訂正して示すとIIIのようになる。

¹ <子音> 𐩮 g 𐩱 k' 𐩰 k 𐩳 ḡ 𐩲 d 𐩴 t' 𐩵 t 𐩶 n 𐩷 l 𐩸 b 𐩹 p' 𐩺 p 𐩻 m 𐩼 f (𐩼 f1 奉母 𐩼 f2 非敷母。f1, f2 の区別がない場合は f とする。1 は旧濁音、2 は清音。以下数字を用いるものは同様)、𐩽 v 𐩾 j 𐩿 č' 𐱀 č 𐱁 ṅ 𐱂 š (𐱂 š1 禪母 𐱂 š2 審母) 𐱃 ž 𐱄 j 𐱅 c' 𐱆 c 𐱇 s 𐱈 z 𐱉 ḥ (𐱉 ḥ1 匣母 𐱉 ḥ2 曉母) 𐱊 γ、𐱋 y (𐱋 y1 喻母 𐱋 y2 幺(影)母) 𐱌 r' 𐱍 r 𐱎 q <半母音> 𐱏 ü 𐱐 i <母音> 𐱑 u 𐱒 i 𐱓 é 𐱔 e 𐱕 o とし、母音 a は()を付して補写する。

Ⅲ各本重入漢字

č‘(a)v	誤以下七字重入此字内	č‘ü(a)v	連 趙 蹕 妮 齧 擱 籜
ce	誤以下二字重入此字内	cè	截 截

Ⅲは小稿の結論の一部であり、これは「原本蒙古字韻」の復元とセットになっている。すなわち、各本重入漢字は各本に重複して収められている字の一方を削除することについてのべたものである。各本が共有する特徴は、元となった本の特徴の反映であるから、各本が拠った「原本蒙古字韻」にも、同様の重複があったと考えなければならない。したがって、各本重入漢字の検討は、現存する『倫敦抄本』には無い部分の復元、すなわち「原本蒙古字韻」の復元につながるのである。今回は、最初の連趙蹕妮齧擱籜について検討する。

3. 各本重入漢字の校訂と「原本蒙古字韻」

さて最初の項目は、“【パスパ文字欠落】連趙蹕妮齧擱籜”と“č‘ü(a)v 連趙蹕妮齧擱籜”のうち、前者を削除したという朱宗文の校訂について述べたものである。そうであるならば、当然のことながら「原本蒙古字韻」にも上記の2グループの諸字が重複して登録されていたことになる。そして、校訂が正しく行われていたならば、「朱宗文本」（朱宗文による校訂が済んだ後の一本）では後者のみが登録されているはずである。そこで、「朱宗文本」の系統をひく『倫敦抄本』の本文を確認すると、“【パスパ文字欠落】連趙蹕妮齧擱籜”に相当する箇所はない。校訂のとおり削除されているのであろう。後者の“č‘ü(a)v 連趙蹕妮齧擱籜”は、下十六bの10行目にある。

č‘ü(a)v [入] 連 趙 蹕 妮 齧 擱 籜 (下十六bの10行目)

3.1. 『新刊韻略』による検討

さて、『倫敦抄本』の所収字が『新刊韻略』から採録されていることは寧忌浮 1992 で明らかにされている。そこで、『新刊韻略』の中に“連趙蹕妮齧擱籜”を探すと、入声の第3覺韻に次のようにある。

入声の第3覺韻

- ・小韻連(敕角切)、趙、蹕
- ・小韻妮(測角切)、齧、擱
- ・新添として籜(勅角切)

入声の第3覺韻に小韻代表字の連(敕角切)があり、その所収字として趙と蹕がある。また同じ第3覺韻に小韻代表字の妮(測角切)があり、その所収字として齧と擱がある。さらに第3覺韻の末尾に新添として籜(勅角切)が一字ある²。これらの反切上字のうち“敕”と“勅”は伝統的な三十六字母でいえば徹母であり、他方の“測”は穿母である。蒙古字韻

² なお、言うまでもないことであるが、この新添の籜の反切上字“勅”と連の反切上字“敕”は同音であるから、籜は小韻連に対して新たに添付された字である。

では、所謂舌音の知・徹・澄母と歯音の照・穿・床母は同音となるから、“連踴蹕妮齷擗”の諸字は蒙古字韻では同音である。

このように、『新刊韻略』には連(敕角切)踴蹕／妮(測角切)齷擗／箝(勅角切)とあり、校正字様で言及された諸字は全てそろっている。いま『倫敦抄本』の当該箇所を挙げ、その諸字に対して、『新刊韻略』における字の順番と反切を付すと次のとおりである。これをみると、『新刊韻略』の順番のとおりになっており、『新刊韻略』が「原本蒙古字韻」の所収字の供給源であることがよくわかる。なお○を付した字は『新刊韻略』所収字のうちの最終字であることを示す。

1	2	③	1	2	③	①	
č'ü(a)v [入] <u>連 踴 蹕 妮 齷 擗</u> 箝							(下十六bの10行目)
3 覺/敕角切			3 覺/測角切			新添/勅角切	

3.2. 問題点

先に述べたように、「原本蒙古字韻」では、“【パスバ文字欠落】連踴蹕妮齷擗”と“č'ü(a)v 連踴蹕妮齷擗”の両者が登録されていたはずである。したがって、「原本蒙古字韻」に諸字を供給した『新刊韻略』にも同様の重複が現れるならば、「原本蒙古字韻」は『新刊韻略』のとおり諸字を配したということになるのであるが、『新刊韻略』はどのようなであろうか。『新刊韻略』の入声韻の関係部分を書き出すと次のとおりである。

- 第一屋韻
- 第二沃韻
- 第三覺韻 【徹母】連(敕角切)踴蹕／【穿母】妮(測角切)齷擗／【徹母】箝(勅角切)
- 第四質韻
- 第五物韻
- 第六月韻
- 第七曷韻
- 第八黠韻
- 第九屑韻
- 第十藥韻 【穿母】綽(昌約切)婁／【徹母】媯(丑略切)連
- 第十一陌韻
- 第十二錫韻
- 第十三職韻
- 第十四緝韻
- 第十五合韻
- 第十六葉韻
- 第十七洽韻

これらの諸字に対応する部分を『倫敦抄本』の中に求めると次のようになる。なお、×

印は『新刊韻略』に未収の字である³。

②	1	②	
ア	č'év	[平] 𦉳	[入] 綽 焯
		2 蕭(宵)/尺招切	10 藥/昌約切

(下十五 a の 3 行目)

①	×	1	②	×
イ	č'ev	[平] 超 悵(悵悵也)	[入] 媯 連 𦉳(似兔青色)	
		2 蕭(宵)/敕宵切	10 藥/丑略切	

(下十六 a の 5 行目)

1	2	③	1	2	③	①
ウ	č'ü(a)v	[入] 連 踴 踴	媯 𦉳 擗	籍		
		3 覺/勅角切	3 覺/測角切	新添/勅角切		

(下十六 b の 10 行目)

『倫敦抄本』の三箇所にあ、い、うとして関係諸韻が現れる。このうちアとイは、先に挙げた『新刊韻略』の第十藥韻の“綽(昌約切)焯”と“媯(丑略切)連”を材料として成り立っているものである。前者は穿母の諸字で、後者は徹母の諸字⁴。うは言うまでもなく、『新刊韻略』の第三覺韻の諸字に対応する。

削除された“【パスパ文字欠落】連踴踴媯𦉳擗籍”に相当する部分を、『新刊韻略』の中から見つけ出したいのであるが見つからない。上に挙げたように、候補となりそうな藥韻の連および関係諸字は、アとイとして『倫敦抄本』に中で然るべき位置をしめているのである。それでは、“【パスパ文字欠落】連踴踴媯𦉳擗籍”に相当する部分が『新刊韻略』の中に無いということは何を意味するのであろうか。先ほどからたびたび述べているように、“【パスパ文字欠落】連踴踴媯𦉳擗籍”と“č'ü(a)v 連踴踴媯𦉳擗籍”が「原本蒙古字韻」に並存していたことは動かし難いわけであるから、『新刊韻略』に対応するものがないということは、それ以外の何らかの判断材料に拠って併置したということになるのであろう。そうであるならば、『新刊韻略』以外のどのような判断材料に拠ったのかということが問題

³ 義注および被注字は郭守正増修『増修校正押韻積疑』(景定甲子・1264)による後代の増字増注である。吉池 1993 参照。

⁴ アには穿母字を配し、イには徹母字を配していることがわかる。しかしこのような配し方は納得がいかない。なぜならば、先に述べたように、蒙古字韻では穿母と徹母は同音となるから、“綽”のグループと“媯”のグループは同音として配置されてしかるべきものであるが、事実はそのようではなく異なる音として配されている。なぜこのような扱いをするのか、何か根拠があるはずであるが今のところ不明である。なお、『古今韻會舉要』では両者は同音となっている。また、李氏朝鮮の『四聲通解』でも同音となっている。

なお、『四聲通解』の注記は興味深いのでここで挙げておく(通解下四十三 a)。ハングル *ciav* の下に藥韻の諸字を置くのであるが、“綽”の注記には“蒙韻 *ciew*”とあり“連”の注記には“蒙韻 *coaw*”とある。“綽”の注記“蒙韻 *ciew*”は、『倫敦抄本』下十五 a の 3 行目 *č'év* と対応させることができるものである。いっぽう、“連”の注記“蒙韻 *coaw*”は『倫敦抄本』下十六 a の 5 行目 *č'ev* ではなく、第 3 覺の下十六 b 10 行目の *č'ü(a)v* に対応するものである。ハングル注記の「蒙韻」(「蒙古韻略」という書名或いはこの書に記されたパスパ字漢語を指す)と『倫敦抄本』とが合わない部分がある。「蒙韻」の引用の仕方に問題があるのか、そもそも「原本蒙古字韻」と「蒙韻」が異なっていたのか、その何れかであろう。

となる。問題となるのであるが、これをすぐに解決することはできない。まずは問題解決のために、“【パスパ文字欠落】連遄蹕妮靨擗籀”と“č'ũ(a)v 連遄蹕妮靨擗籀”のうち、前者の欠落したパスパ文字を復元し、「原本蒙古字韻」の中での然るべき位置を見つけなければならぬのであるが、それは可能であろうか。

3.3. 欠落パスパ文字の復元

そこで、朱宗文が蒙古字韻の校訂に用いたという『古今韻會舉要』（朱氏の序文では「古今韻會」とする）の分韻の状況を参照する。この韻書の入声第三覺韻に収められた全ての小韻代表字を挙げると次のようである。

- ・覺(角清音)、𪗇(角次清音)、𪗈(羽次清音)、學(羽濁音) 已上屬覺字母韻
- ・嶽(角次濁音)、剝(宮清音)、璞(宮次清音)、𪗉(宮濁音)、邈(宮次濁音)、妮(次商次清音)。蒙古韻妮屬郭字母韻、連(音與妮同)。蒙古韻連屬郭母韻、渥(羽次清音) 已上屬各字母韻
- ・捉(次商清音)、𪗊(音與捉同)、朔(次商次清次音)、湼(次商濁音)、濁(音與湼同)、擗(次商次濁音)、𪗋(半微商音) 已上屬郭字母韻

上に示したように『古今韻會舉要』では入声第三覺韻の内部は、覺字母韻、各字母韻、郭字母韻という三種の韻母のグループに分かれる。ここで言う“字母韻”とは『古今韻會舉要』特有の韻母のグループ分けである。それぞれの字母韻に属する諸字は、『倫敦抄本』に於いて、どのようなパスパ文字で表記されているかということを見ると次の通りである。

- ・覺字母韻 パスパ文字の ev~i(a)v
- ・各字母韻 パスパ文字の (a)v
- ・郭字母韻 パスパ文字の ũ(a)v

問題となる小韻代表字の妮(所属字は靨と擗)と連(所属字は蹕のみ)は、各字母韻(a)v の一員であるが、その連と妮の注記をみると両者共に“蒙古韻では郭字母韻に属す”とある。すなわち、

- 連と妮 . . . 『古今韻會舉要』各字母韻(a)v
- 連と妮 . . . 「蒙古韻」郭字母韻 ũ(a)v

さて、『古今韻會舉要』の注記に出てきた“蒙古韻”(「蒙古韻略」という書名或いはこの書に記されたパスパ字漢語を指す)は現在では逸書でありその全容を知ることはできないが、ここで挙げた『古今韻會舉要』や李氏朝鮮時代の『四聲通解』には逸文がある。それによると「原本蒙古字韻」と同一の書であると論じられるほど両者の音の一致率は高いという⁵。もっとも異なる体裁の書であったとする論があり⁶、私もそれに賛成するが、両者

⁵ 寧忌浮 1997 参照。この結論については同意できない部分がある。

⁶ 遠藤 1994 及び中村 2003 参照。

の音が比較的よく合うことも事実である。また、『古今韻會舉要』の字母韻の成立に「蒙古韻略」「原本蒙古字韻」などのパスパ文字資料の影響が認められることも確かである⁷。そうであるならば、「原本蒙古字韻」の“【パスパ文字欠落】連遄蹕妮齶擗籜”と“č'ü(a)v 連遄蹕妮齶擗籜”の欠落したパスパ文字を、『古今韻會舉要』から得られる情報により復元してもそれほど不当ではないであろう。すなわち、『古今韻會舉要』の各字母韻を「原本蒙古字韻」の“【パスパ文字欠落】連遄蹕妮齶擗籜”に相当するものとみなし、『古今韻會舉要』の郭字母韻を「原本蒙古字韻」の“č'ü(a)v 連遄蹕妮齶擗籜”に相当するとみなすのである。そして、校正字様も、“č'(a)v 連遄蹕妮齶擗籜”と“č'ü(a)v 連遄蹕妮齶擗籜”であったとする。

このようにして校正字様の欠落したパスパ文字を č'(a)v として復元するわけであるが、実はこの č'(a)v という音節は、『倫敦抄本』に既にある。すなわち、下十三 a の 5 行目の“č'(a)v [平]抄 [上]炒譟”。平声字と上声字を挙げるが、入声字はない。「原本蒙古字韻」では、この上声字の次に、[入]連遄蹕妮齶擗籜が続いていたのであろう。いま、復元した「原本蒙古字韻」の状態を示すと次のようになる。

ア č'(a)v [平]抄 [上]炒譟 [入]連遄蹕妮齶擗籜 (下十三 a の 5 行目)
 イ č'ü(a)v [入]連遄蹕妮齶擗籜 (下十六 b の 10 行目)

3.4. 「原本蒙古字韻」の覺韻正齒音・舌上音二等字

復元した部分を含め覺韻の正齒音・舌上音二等字が「原本蒙古字韻」でどのようにパスパ文字で表記されているかをみると次のようである。

č'(a)v [平]抄 [上]炒譟 [入]連遄蹕妮齶擗籜 (下十三 a の 5 行目)
 nǔ(a)v [入]擗 (下十六 b の 8 行目)
 jǔ(a)v [入]捉斲斲涿涿琢卓倬啄樵(生稷) (下十六 b の 9 行目)
 č'ü(a)v [入]連遄蹕妮齶擗籜 (下十六 b の 10 行目)
 čü(a)v [入]湼灑灑濁擗擗籜(罩也)濯 (下十七 a の 1 行目)
 š2ü(a)v [入]朔嗽稍槩數箭 (下十七 a の 2 行目)

これを見ると覺韻の字は全て合口介音-ü-を持つ ü(a)v であるが、無声有気音声母の連遄蹕妮齶擗籜のみが(a)v と ü(a)v を併せ持つ。これは『古今韻會舉要』の状況を彷彿とさせる。『古今韻會舉要』覺韻の正齒音(舌上音)二等字の状況につき、花登 1997 の指摘を引用すると次のようである。

宕江攝の正齒音・舌上音二等字は一般に唇音化する。覺韻の正齒音(舌上音)二等字の場合も同様で、大部分は唇音化(合口化)して合口の郭字母韻に入る。しかし、次商次清音「妮」(初母)・「連」(徹母)のみは開口の各字母韻に入れられている。一方、郭字母韻の方には次商次清音はない。(185 頁)

述べるところは、『古今韻會舉要』の字母韻では、覺韻の正齒音(舌上音)二等字は合口化

⁷ 中村 1994 及び花登 1997 の 127 頁、185-186 頁参照。

し郭字母韻 $\ddot{u}(a)v$ となるのであるが、次商次清音即ち無声有気音の妮と連のみは合口化せずに各字母韻 $(a)v$ となっているということである。

「原本蒙古字韻」から $\dot{c}'\ddot{u}(a)v$ [入]連遼蹕妮靨擲籜を除くと『古今韻會舉要』の状況となる。このように、無声有気音のみ合口化しないというような特殊な事情が「原本蒙古字韻」と『古今韻會舉要』の両者に見られるということをもどのように説明すればよいのであろうか。

もう一度問題としている諸字の反切をみると、連(敕角切)遼蹕/妮(測角切)靨擲/籜(勅角切)の如くである。これらは開口韻であるから、そこから予想し得る順当な音形は $\dot{c}'(a)v$ であろう。合口介音- \ddot{u} -を有する $\dot{c}'\ddot{u}(a)v$ は伝統的な音の反映とは言い難い。逸書「四聲通攷」(1455年頃)によった『四聲通解』(1517年)をみると、ハングル $\dot{c}av$ の下に妮媵孀(蒙韻 $\dot{c}oaw$ 俗音 $\dot{c}oaw$ 並下同)靨擲籜積戳とある(通解下三十九 a)。この注記によると、「蒙韻」(すなわち「蒙古韻略」)の音 $\dot{c}oaw$ は、“俗音”に相当するということであるから、時代はやや下るが、俗音すなわち中国北方で当時通行していた音が $\dot{c}oaw$ であるということなのであろう。そうであるならば、連遼蹕妮靨擲籜には伝統的な音として $\dot{c}'(a)v$ があり、やや口語的な音として $\dot{c}'\ddot{u}(a)v$ があつたとしても大過ないであろう。「原本蒙古字韻」に二音が併存するという点については、これは想像であり他に解決しなければならない点もあるが、「蒙古韻略」 $\dot{c}'\ddot{u}(a)v$ +『古今韻會舉要』 $\dot{c}'(a)v$ → 「原本蒙古字韻」 $\dot{c}'\ddot{u}(a)v$ と $\dot{c}'(a)v$ という点もかもしれない。

もっともこれは、『古今韻會舉要』の注記“蒙古韻連屬郭母韻”や『四聲通解』の注記“蒙韻 $\dot{c}oaw$ 俗音 $\dot{c}oaw$ 並下同”の“蒙古韻”“蒙韻”(おそらく両者ともに「蒙古韻略」に関わる表現であろう)が、各字母韻 $(a)v$ に相当する音を併せ持つておらず、郭字母韻 $\ddot{u}(a)v$ に相当する一音のみを持つていた場合の想定である。それにしても、なぜ無声有気音のみ合口化しないのかという問題は依然として残る。

4. おわりに

最後に、小韻代表字の連と妮が、関係諸本においてどのように扱われているかということにつき、『古今韻會舉要』の字母韻を用いて並べ示すと次のようになる。

連と妮	
『古今韻會舉要』	各字母韻 $(a)v$
「蒙古韻」	郭字母韻 $\ddot{u}(a)v$ 【?と各字母韻 $(a)v$ 】
「原本蒙古字韻」	各字母韻 $(a)v$ と郭字母韻 $\ddot{u}(a)v$
『倫敦抄本』	校訂による削除 各字母韻 $(a)v$ と郭字母韻 $\ddot{u}(a)v$

“連妮”の音は、『古今韻會舉要』本体の字母韻と『古今韻會舉要』所引の「蒙古韻」(すなわち「蒙古韻略」)とは異なっている。もっとも、「蒙古韻」では各字母韻 $(a)v$ と郭字

母韻 ū(a)v に相当する音が併記されていたけれども、特徴的な音である郭字母韻 ū(a)v のみを記したということも十分に考えられるので【】を付して可能性のあるものとして挙げておく。「原本蒙古字韻」は、異なる二つの音を併記していたことは先に述べたとおりである。

朱宗文はこのような状況をみて、「蒙古韻」と同様の郭字母韻 ū(a)v を採用し、「原本蒙古字韻」にあった一方の各字母韻(a)v を廃したというわけである。その結果は『倫敦抄本』に現れている。『倫敦抄本』では校正字様の通りに直っているのである。朱宗文は序文において『古今韻會舉要』(序では古今韻會とする)を賞賛しこの書によって蒙古字韻の各本を校訂すると述べているわけであるが、ここでは『古今韻會舉要』本文の判断に拠らず、「蒙古韻」を採用したしたのは何故かという疑問はこのころ。おそらくは、無声有気音の連聲蹕妮齶擗籜だけが例外的に合口化していなかったところ、「蒙古韻」に合口化した音のあることを認め、その ū(a)v を採用し、整然としたパスパ文字の表記を求めたのであろう。

<参考文献(発行年順)>

寧忌浮 1992. 「《蒙古字韻》校勘補遺」, 『内蒙古大学学报(哲学社会科学版)』1992年第3期, 9-16頁。

吉池孝一 1993. 「『蒙古字韻』の増補部分について」, 『語学研究』(拓殖大学語学研究所)第72号, 17-31頁。

中村雅之 1994. 「『蒙古字韻』と『古今韻會舉要』」, 『富山大学人文学部紀要』20。

遠藤光暁 1994. 「『四声通解』の所拠資料と編纂過程」, 『論集』(青山学院大学)第35号, 117-126頁。

花登正宏 1997. 『古今韻會舉要研究』東京:汲古書院。

寧忌浮 1997. 『古今韻會舉要及相關韻書』北京:中華書局。

中村雅之 2003. 「四声通解に引く蒙古韻略について」, 『KOTONOHA』第9号, 1-4頁。

吉池孝一 2008. 「蒙古字韻の校訂と増補について」, 『KOTONOHA』第70号, 7-16頁。

吉池孝一 2009. 「原本蒙古字韻考」, 『KOTONOHA』第81号, 10-17頁

* 『KOTONOHA』のバックナンバーは、サイト「古代文字資料館」<http://www.for.aichi-pu.ac.jp/museum/>でご覧になれます。